公共性×詩の力：
ジョージ・フロイド事件におけるデモと詩の生成

井出里咲子
（筑波大学）

1．はじめに

本発表では 2020 年 5 月にアメリカのミネアポリスで起きたジョージ・フロイド事件を発端に生じたデモから SNS で拡散された動画を取り上げ，公共の場に創発的に立ち現れる詩的な言葉の力について考える。分析では，人がいかに言葉に心を動かされるのかを問いつつ，相互行為的に怒りや悲しみといった情動(affect)が詩的構造性をもって，秩序化・体系化される過程に注目し，ことばが歴史性をまといながら反復的に公共空間を構築する過程を記述的に考察する。

2．#Black Lives Matter 運動

2020 年という 1 年を印象づけた世界的な出来事の一つにアメリカで発生したブラック・ライブズ・マター(Black Lives Matter)運動がある。「黒人の命を粗末にするな」とも訳されるこの運動は「第 2 の公民権運動」（加藤 2020）とも呼ばれるが，その歴史的な経緯は以下の通りである。

アメリカにおける奴隷制度は，それが合法化されていた 17 世紀後半から 1863 年の奴隷解放宣言までのおよそ 200 年にわたり続いた。しかし奴隷解放後の民衆の不満やクー・クラックス・クラン(Ku Klux Klan)に代表される白人至上主義集団の活動から，黒人はリンチの対象となり，南部では 1950 年代までに 4,000 人に近い黒人が殺害されている。奴隷解放後，差別や不当な暴力に対する無関心や忘却に異議を唱える黒人とその支持者たちが，南部の州を中心にフリーダム・ライド(Freedom Ride)やシット・イン(Sit In)といった非暴力の抵抗を続け，1963 年にはマーチン・ルーサー・キング牧師らの先導によるワシントン大行進が実行され，1965 年に黒人の投票権法が成立している。

一方，1980 年代以降になるとレーガン政権下の麻薬戦争の名のもとに，大量の黒人男性が収監されるようになる。そこでは肌の色が濃いほど取り締まられ，刑が重くなるという人種プロファイリングがおこなわれ，犯罪者としての黒人ステレオタイプが蔓延する。その後 2012 年にフロリダ州で 17 歳のトレイヴォン・マーティンを射殺した男性に翌年無罪判決が下されるが，これに抗議した 3

人の黒人女性活動家が SNS 上に，(#)ハッシュタグ「ブラック・ライブズ・マター(#BLM)」をシェアしたことから BLM 運動が始まる。また，2014 年にミズーリ州にて，18 歳のマイケル・ブラウンが白人警察に射殺されたことを機に，制度・組織的人種差別としての“systemic racism”に対する全米規模の抗議運動が広まる。そして 2020 年にミネソタ州ミネアポリスで，警察官の拘束によりジョージ・フロイドが死亡する。ここでは通りがかりの高校生が拘束から殺害までの一部始終をスマホで一本の動画として録画し SNS で拡散した内容が，翌日の 5 月 26 日にミネアポリスで抗議運動を引き起こした。その後，デモは全米 3,000～4,000 地域へと広がり，アメリカ史上前例のない規模となった[1]。

20 世紀の公民権運動では，新聞，写真，テレビといったマス・メディアが大きな役割を果たしている。特に「善良な市民(respectable citizen)」戦略により，メディアなどが創造してきた怠け者・暴力的といった否定的黒人のステレオタイプへの抵抗もなされてきた（坂下 2018)。一方，第二の公民権運動である BLM 運動では，スマホのカメラなどに収められた映像や人々の声が，ツイッターなどソーシャル・メディアで共有拡散され，ハッシュタグ・アクティビズム(Hashtag Activism)につながっていく。

3. デモ×詩の力

次にデモという社会活動の持つ詩的な力について考える。下の写真は 2020 年 7 月 30 日に NBA バスケットボールゲームでの国歌斉唱の際に片膝をつくポーズを取る選手たちを写したものである。“Taking a knee”と呼ばれるこの姿勢は，2016 年に NFL のコリン・キャパニック選手が国歌斉唱の際，警察による黒人への暴力への抗議として始めたもので，当時は国家への侮辱行為として非難の対象になった。しかし今では，デモなどで市民に交じり警察官も一緒にニーリング(kneeling)をするなど，その記号的な意味内容が変化しつつある。

一般にデモという行為は，市民による政府やその他の相手に対しての要求貫徹・抗議意志の集団的な表現を指すが，英語では“Protest”“Rally”“March”などの表現が用いられ，同じ方向に向かって同じスピードで歩く，同じリズムで拳を突き上げる，同じ主張のことばが書かれたプラカードを掲げるといった身体的・視覚的な反復が旗印となる。たとえば突き上げられた拳の図像は，1960 年代にマルコム・X で知られるブラックパンサー党が激しい怒りの

（出典）https://www.nbcnews.com/news/nbcblk/nba-players-protest-racial-injustice-league-returns-action-n1235468

感情そしてブラックパワーのモチーフとして使ったことが広まって今も続く，社会的な記号である。

声に出して反復する行為としては，シュプレヒコール（“Sprechchor”），チャンツ（“Chants”），クライ（“Cries”）などがあり，ブラック・ライブズ・マター運動では“Black Lives Matter”，”I can't breathe”，”What’s his name?—George Floyd!”などと，一定のリズム，特定の音域や強弱でくり返すスローガンが公共空間に刻まれた。つまりデモという場において，公共的・社会的意味としてのメッセージは，反復的，創造的，そして身体的につくられるのである。

4. #ハッシュタグにおける創造と象徴

次にハッシュタグにおける創造と象徴について考える。「アラブの春」以降，デジタル技術が社会運動と一体化し，デモ活動は主に SNS を通じて組織化され，抗議活動はハッシュタグで呼ばれるようになった。その萌芽期当初は“Slacktivism”“Clicktivism”とも批判されたこうした活動は，#MeToo 運動のようにハッシュタグ・アクティビズムにより，共時的な共有ができるようになった（トゥフェックチー　2018）。

たとえば BLM 運動における“#restinpower”は，もともと全米黒人地位向上委員会にて使われていたものが 2012 年のトレイヴォン・マーティン事件から一般的に広まった。これは従来の弔い表現である“rest in peace (RIP)”をもじった一種のスピーチプレイであり，社会的な不正義から犠牲になった人を追悼する表現として，悲しみだけではなく「怒り」を指標すると同時に，＜犠牲者としての黒人＞というナラティブから＜犠牲者をエンパワーする＞という言説の書き換えがされている。一方ハッシュタグ“#SayHerName”は，2020 年の 3 月にブリオナ・テイラーが警察に誤って殺害された際，犠牲者である黒人女性を忘れないという意味で作られた。同類の#SayHisName,#SayTheirNames とともに，犠牲者の名前を言う，言い続ける，つまり反復することで不当に亡くなった人々の物語を続け，アメリカ社会が変革の道筋にあること，また彼らと協働して戦う姿勢が象徴的に指標される。

このようにネット空間とリアルなデモ空間の双方で，またその空間を行き来しながら，人々は同時につながり合い，同時進行的に活動の目撃者となったりその参与者になる。そして，そうした活動を通じて，既存の公共の秩序や規制に対する変化を要求していると言える。次章からは，ジョージ・フロイド氏殺害をきっかけに起きたデモの中で一般市民が撮影，SNS で拡散した動画を分析対象に，ことばのもつ詩的な力について分析的に論じる。

5. 動画分析

5.1. 動画のコンテクスト

本稿で分析する動画は二つであるが，動画 1 はジョージ・フロイド事件が起きた 6 日後の 5 月 31 日にノースキャロライナ州のシャーロットビルで，動画 2 は 6 月 1 日にテキサス州ヒューストンで撮影されている。いずれもその場にいた複数の聴衆によりスマホなどで録画された内容が SNS で拡散され，拡散と同時にテレビ・新聞などのメディアにて「強くパワフルなメッセージ」「嘆願(plea)」などと評されている。尚，全米朝の情報番組 Good Morning America によれば，動画 1 は 2020 年 6 月 3 日時点で 2200 万回再生されている。また Houston Chronicle（2020 年 6 月 1 日付）によれば，動画 2 は 700 万回再生されており，全米のデモ活動が隆起する最中にこれらの動画は非常に注目を集めていることがわかる。二つの動画は共に，情動としての怒りの指標として“I'm angry”という言葉が出てくること，さらにカメラを前にしたパフォーマンス性のある即興劇であることが共通点と言える。

動画 1 におけるやりとりは 3 人の黒人男性によるもので, 31 歳のカーティス・ヘイズ・ジュニア氏を中心に展開する。シャーロットのこの日のデモに参加した 3 人は，偶然この場に居合わせ，デモ隊の前に警察官が立ち並ぶ境界線に位置している。ここではまず 45 歳の男性が怒りの言葉を叫び出したことから，周りでデモに参加する多くの人々がこの男性にスマホのカメラを向ける。これに対し 31 歳のヘイズ氏が，45 歳の男性をなだめようとする過程で，側にいた 16 歳の青年をやり取りの場に引き込んでいる。

5.2. 動画1（前半）の分析

以下は動画 1 の前半の文字化資料であるが，行番号の右に振られた 31，45 という数字はそれぞれ参与者の 31 歳の男性と 45 歳の男性を指す（文字化方式一覧については巻末を参照)。この動画では激しい口調，ピッチの高低，音韻的なアクセント，くり返しが多用される一方，特徴的なのが年齢，世代，時間の経過を表す表現の利用である。

まず 31 歳の How old are you?”という質問に対し, 12 行目で 45 歳が“I'm forty five”と答え，それに対し 31 歳が“forty five and I'm thirty one”と答えるやりとりがある。これに対し 14 行目で 45 歳の男性は“and I'm tired of seeing this shit man”と間髪入れずに言うが，二人によるこのやりとりは“I'm forty five”“I'm thirty one”“and I'm tired of”という「A，B，and C 型」の構造を成す。さらに最後のくり返しである“and I'm tired of”のところで発話内容の意味フレームが拡張し，「年齢」という尺度から 45 年という長きにわたる「抵抗の年月」，そしてこ

の男性のそれに対する怒りと苛立ちが協調的、創発的に立ち上がる。

前半

01 31: I understand↑ =
02 45: =while we - we- worried about this [((inaudible))
03 31: [I understand↑ =
04 45: =but we won't stand up fo[r the motherfuckers] that get killed
05 31: [I understand↑]
06 45: on a [daily basis]
07 31: [come here talk to me]
08 (.)
09 31: I understand (0.3) how old are you↑ =
10 45: =I'm tired of this [shit man]
11 31: [>how old are you↑<]((45 の両腕をつかむ))
12 45: I'm forty five years [old ma:n]
13 31: [forty five] and I'm thirty one
14 45: and I'm tired of see[ing this shit man]
15 31: [and you the older] generation than me and
16 45: [right]
17 31: [I am] too
18 45: and we've been standin' [around (.) as the older]
19 31: [but let me tell you something]
20 45: ones taking all this bullshit (.) always hoping for a kumba
21 fucking ya
22 (0.3)
23 31: come 'ere=
24 45: = always standing around for a kumbaya (0.2) ain't nobody coming
25 to protect us↑
26 31: let me [tell you something]((45 の両脇を掴んで正面に向き合う))
27 45: [we gotta sta]rt our own fucking li[ves
28 31: [I understand (0.2)
29 31: but let me tell you something right here (0.7)
30 this sixteen (0.3) he's **six**tee:n ((16に向き引き寄せる))
31 45: and they gonna kill him next [week]
32 31: [he's] **six**tee::n
33 45: what we gonna do
34 31: you tell me
35 45: what we [gon ' do]
36 31: [but this ain't] the way ((後方を指さす))
37 (0.7)
38 45: [°man°]
39 31: ['cause they] ready to let loose↑ (.) if the U::nited States (.)
40 the president say (.) if you loot we shoot=
41 45: =[you loot we shoot]
42 31: [(xxx go in] the so[il)
43 45: [I know it (0.3)
44 31: ((inaudible)) [((inaudible))
45 45: [I know (0.3) but it's time to stand up (.)
46 31: [(someone get it going on↑)]
47 45: [at this point - at]this point↑ (0.3) I'm ready to die
48 31: °let me [tell you somethin'°] ((16の両脇を掴み向合う))
49 45: [for what's] going on

動画１（前半）

次に 18 行目から 25 行目にわたる 45 歳の語りに着目すると，ここにも平行体の 3 連構造が浮かび上がる。“and we've been standing around”に続く“always hoping for a kumbaya”“always standing around for a kumbaya”“ain't nobody coming to protect us”では，“always”“always”“ain't”の語頭にアクセントを置きながら，同じ音調がくり返され，意味が詩的に顕在化する。平行体の後半部分でも，“standing around”（ただうろうろする），“hoping for a kumbaya”（神様助けてとお願いする），さらに“ain't nobody coming to protect us”（誰も助けに来てくれない）という平行体の 3 連構造が，怒りとしての情動を塗り重ね，拡張させていく[2]。

さらに 45 歳の男性の主張は 45 行目へとつながり“it's time to stand up”（立ち上がる時だ），“at this point I'm ready to die for what's going on”（この時点で死ぬ覚悟はできている）と主張する。ここでの“stand up”という表現は，18, 24 行目で語られた“standing around”という行為とは対比的に語られ，「祈っているだけでは何も変わらない。だから立ち上がるべき」という一貫性のあるロジックが浮かび上がる。

これに対し 31 歳の男性は腕を前に組み，目上への敬意を表しつつ，何度も“I understand”と相手への理解を示す言葉をくり返す。この言葉はあいづちのように 45 歳の言葉と重複してくり返されるが，7 行目の“come here talk to me”，19

行目の“but let me tell you something”，29 行目の“but let me tell you something right here”というくり返しを持って，会話のフロアが取られる。この時点で 31 歳の男性は，側にいた 16 歳の青年をやりとりの場に引き入れるが，この 31 歳の男性はこの動画が撮影される少し前にたまたま警察隊との境界線にてデモに参加していた 16 歳に声を掛け，年齢を聞いている。30 行目以降，この 31 歳の男性は“he's sixteen”（こいつは 16 歳だ）を 3 回くり返しているが，36 行目で“but this ain't the way”と，“this”のところで，後ろの警察隊のほうを指さしながら，このやり方ではないと主張する。

ここまでのやりとりでは，「今こそ立ち上がるべきだ」とする 45 歳と「このやり方ではない」とする 31 歳の主張が対立を見せている。しかし 31 歳と 45 歳の言葉は，互いの言葉がくり返され，引き込みや共鳴としてのレゾナンスが生じている。例えば 12 行目の“I'm forty five years old”に続く 13 行目の“forty five”，15 行目の“the older generation”と，それをパラフレーズした“the older ones”（18，20 行目），さらに 31 歳が当時のトランプ大統領の発言を引用した“if you loot we shoot”（40 行目）を，間髪入れずに 45 歳が“you loot we shoot”（41 行目）とくり返す場面は，協奏的な創発の現場であり，引き込みによる声の共鳴が起きている。

5.3. 動画 1（後半）の分析

動画 1 の後半部分も前半同様に年齢・世代表現が頻出する。さらに“ten years from now”，“four years ago”などの未来と過去への言及表現から時間の経過が指標され，やりとりのスキーマとしての時間軸を構成する。さらに 53，59，63 行目にあるように，31 歳の語りのなかには“right now”“right here”という直示としてのダイクシスが頻出する。

ここで 31 歳の男性が，やりとりに招き入れた 16 歳の青年に向けた 53 行目からの嘆願内容に着目する。“What you see right now is gon' happen ten years from now”（今見ていることは 10 年後にも起きる），“and at twenty six you gonna be doing the same thing I'm doing”（10 年後に 26 になった君は，僕と同じことをしている），“ten years you gon' be right here too”（10 年後，君はまたここにいる）と，同じ意味が形式を変えて 3 回くり返され，そのなかで，今ここととしての現在の指標から，10 年後の未来へのこの場所が指標される。つまり“ten years”“you gonna be”“right here”“right now”といった表現が協調的にくり返されることにより，歴史社会的な時間軸のなかに同じことが繰り返されてきて，また同じことがくり返されるという主張が，明示的・非明示的に伝えられる。次に 67 行目では“he angry at forty six. I'm angry at thirty one. you angry at sixteen”という平行体を通して，この場に居合わせた 3 人の男性を結び付ける共通の情動とし

ての「怒り」が明示的に示される。

後半

50 31: ° let me tell you [somethin'°
51 16: [（（小さく頷く））
52 45: that's the problem that we [got
53 31: [what you see [**right now** (0.4) is gon'
54 16: [((頷き 弱2 強5))
55 31: happen (.) ten_ years from now (0.4) and at ↑ **twenty six** (.)
56 you gonna be doing the **same** thing I'm [doing
57 31: you understand[that↑
58 16: [°yes I do° ((頷き強5))
59 31: **ten years** (0.7) you gon' be **right here** [too
60 16: [((頷き強2))
61 45: but he also gotta [stand up for what he gotta stand up for]
62 31: [so what I need ↑y'all to do]
63 31: **right now** and at sixteen (0.3) is come up with a
64 better way. (.) 'cause how we doin' it (.)
65 it ain't [workin'.
66 16: °yes sir°[((頷き強 2))
67 31: he angry (0.2) at forty six (.) I'm angry at thirty one (.) you
68 angry at sixteen
69 (2.1)
70 45: (this thing) is over man (.) it's over [man]
71 31: [you under]stand me↑
72 16: yes I do
73 31: [puttin' your]self in harm's way
74 45: [it's over]
75 (0.4)
76 31: [is not the way=] [
77 45: [I know(.) I know it's] [not
78 16: [ ] [((頷き弱5、弱4))
79 (1.3)
80 31: you (0.2) and [(then) other your counterparts the same age >and
81 45: [((画角に戻り31を見つめる))
82 31: them< have (that) same power (.) y'all come up with a better
83 way↑ (.) cause↑ we ain't doing [it
84 16: [((頷き 弱2 弱2 弱7))
85 (1.6)
86 31: [and I have a fi:ve year old [son (.) and it ain't [happening
87 45: [((31 から目をそらし31の肩に触れる))
88 16: [[((頷き弱3 強3))
89 (3.2)
90 31: I marched four:r years ago (.) Keith Lamont Scott (.)
91 did the **sa:**:me shit y'all doing (0.9) the sa::me (.) exact thing
92 night(0.6) after night (.) after night
93 (3.4)
94 31: it don't matter↑ (0.4) come up with a better way=
95 16: =((頷き 弱1))(0.5)
96 31: you understand me↑ (.) you keep yourself ((safe))

動画 1（後半）

ここから 31 歳は 16 歳の青年に向けて嘆願を始めるが，ここでも同じ意味内容が 3 回くり返される。これらは「“come up with a better way”（もっといい方法を見つけてくれ）」,「“because”（なぜなら）」「うまくいっていないから」という論理構成になっていて，それが最初に 2 回くり返されるとともに，それぞれの後半部で“it ain't workin'”，“we ain't doing it”“and it ain't happening”と，“it”と“ain't”，さらに動詞の進行形が平行体を成してくり返される。そして 86 行目で“and I have a five year old son and it ain't happening”と，“and”を 2 回使った変形型の「A，B，and C 構造」ができている。

この 31 歳の嘆願は“cause we ain't doing it”（83 行目），その次の“and I have a five year old son”（86 行目）のところで声がしわがれ，裏返り，感情的なクライマックスを迎えている。さらに 90 行目の“I marched four years ago”というところで，4 年前にも同じようにデモをしたことが強調され，変化が起きないこと，同じことがくり返されるという怒りと悲しみが，“same”そして“night after night”と表現を変えて強調される詩的顕在を迎える（片岡 2002，2017）。

最終的に 94 行目で，31 歳の男性は,「もっといい方法を見つけてくれ（“come up with a better way”）」と 16 歳に伝えるが，この後半全体のやりとりでは，くり返し，平行体，対比といった詩的構造そのものが,「嘆願する」というモダリティとしてのスピーチアクトを実働させていると言えるだろう。

さらに全データを，詩的構造が照らし出す非明示的テクストとして考察すると，45 歳，31 歳，16 歳は，“right here”“right now”という今ここで出会い，やりとりをしているが，その前提として，このデモという場の公共空間に共有される怒りや痛みという情動がある。この情動は“he angry”“I'm angry”“you angry”という詩的構造から明示化され，やりとりの参与者同士と，意味の場としての記号的な社会空間を結び付ける。さらに，45 歳による“always hoping for a kumbaya”のくり返し，31 歳による“the same exact thing night after night after night”のくり返しが，主張する内容は違うものの，この 2 人の成人男性，さらにそれ以前の世代から連綿と受け継がれてきた怒りや苦しみを反復的に増幅させる。加えて，16 歳の未来，さらに 5 歳の未来への言及から，「同じことがくり返される」という怒りが一貫した体系として浮かび上がる。

この文脈のなかで 31 歳は，“this ain't the way”と，今自分たちがおこなっているデモ，つまり警察との衝突が答えではないとし，より良い方法を考えることを若い世代に嘆願する。そのスピーチアクトとしての嘆願を支えるロジックが，三つの“it ain't”の詩的くり返し，そしてダイクシスの“it”の指標的な拡張を通してなされる。最初の“it ain't working”（65 行目）の“it”は，最もオリゴ(origo)に近い，今ここのデモや警察への抵抗を指す“it”であるのに対し，次の“we ain't doing it”（83 行目）では，若い世代と対比的に，自分たちの世代を“we”で総称した上で，“better way”としての“it”（それ）が実現できていないということを嘆いている。そして最後の“and I have a five year old son and it ain't happening”（86 行目）での“it”は，アメリカ社会が目指すべき方向，来るべき理想社会としての架空の“it”に到達していないということを非明示的に指標する。つまりこのやりとりでは，数字を通した時間軸のスキーマ，くり返しと平行体に加え，ダイキックセンター(deictic center)としての「今・ここ」から世代的な時間軸，さらには，アメリカ社会の歴史的空間への指標的な意味範疇が層を成して広がり，このやりとりと 31 歳の嘆願をパワフルに，聞く人の心を動かすものにしていると考えられる。

5.4. 動画 2 の分析

動画 2 は，テキサス州ヒューストンの警察署長アート・アセヴェド(Art Acevedo)氏が中心的な話し手となる[3]。ここでは，彼のモノローグ的な語りに対し，周りのデモ参加者が群集として応答をおこなっている。動画では，57～80 行目に挿入されているスモールストーリーを省略し，一貫性を持ったナラティブとして 89 行目までを分析する。尚，文字化資料における P は警察署長アセヴェド氏（以下、「署長」），C は群衆（crowd）を指す。

15 P: and what I love about **this** man and **this** man and **this** man what
16 I love about **this** city
17 (0.3)
18 C: >yeah<
19 P: is that they want people of color (.) to be- t- talked about
20 as bein ' thu:::gs and we're bu:::ms>and and and my<
21 people .h for- as a immigrant [or rapist
22 C: [hmm
23 P: we- well y'know what (0.8) we built **this** count[ry ↑
24 C: [yeah
25 C: ((3.0秒ほど騒ぐ))
26 P: [and I got new::s for them
27 C: [yeah:
28 (.)
29 P: >we ain't< goin' nowhere
30 C: =nowhere
31 P: [okay, we are not goin' (.) no:where (0.4)
32 C: [yeah
33 P: the ship has sail:ed=
34 C: =yeah ↑
35 P: so if you've got hate in your heart for people of color (.)
36 get o:ver it=
37 C: =[get o:ver it
38 [yeah
39 [yeah
40 P: okay ↑ because **this** city (.) is a minority majority city=
41 C: =[yes
42 [yeah ↑
43 P: [=and **this** city (.) is a city where blacks andwhi:tes (.)
44 and bro:: wns (.) and legal >and illegal< all get together
45 C: [yeah
46 P: [because we judge each other by the content >of our hearts<
47 C: yeah
48 P: [okay ↑
49 C: [y::es
50 [say it
51 P: so I am a:ngry
52 C: yessir yeah
53 P: >I'm< a:ngry
54 C: ye::s
55 P: I'm a:ngry because (.) people don't understand(.) is why black people so mad
56 P: so I'm here tell you (.) we will march as a department with (.)
82 everybody in **this** community (.) I will march until
83 I can't stand no more
84 (0.8)
85 P: but I will not, (I - I- truth said) I will not allow (.) anyone
86 to >tear down **this** city<
87 C: amen
88 P: because **this** is our city=
89 C: =yeah

動画 2

デモは群衆が集団で行うものであるが，この動画ではデモの最中に行われた署長の語りの間に，コール・アンド・レスポンス(call and response)形式で群衆による応答が差し込まれる。この応答は，特に 26 行目の“and I got news for them”以降，掛け合いのリズムが増してゆき，ほぼワンフレーズごとに“yeah”“yes sir”“amen”という声が複数差し込まれるようになる。これらの声は，いずれも署長の言葉を肯定的に評価し，支持する内容だが，あいづちのように重複してくり返されるとともに，署長の“nowhere”に群衆が“nowhere”と返し，“get over it”がラッチングしながら“get over it”とくり返されるといった引き込みも見られる。つまり，声の共鳴を通した情動が非明示的に立ち上がっている（DuBois 2014，井出 2020）。

また署長である「P」（ポリス）の語りには，テクスト全体を通してダイクシスとしての“this”を強調した用語が多く表れる。“This man”“this city”“this country”“this community”といったこれらの用語は，地面を人差し指で指す力強いポインティングのジェスチャーと共起して，聞き手である群衆と共有される場としての発話のオリゴを形成する。

署長の語りのスキーマを構築するのが人称詞の対比的な使用方法である。20，23，29，31 行目の署長の語りは主に“we”が主語となっているのに対し，それとは異なる対話的他者は，“they”（19 行目）“them”（26 行目）“you”（35 行目）

として表象される。語りの冒頭の 15 行目で，署長は“what I love”と“I”を主語にしながら，ここにいる市民としての“this man”，そして“this city”としてのヒューストン市に言及する。続く 19 行目からは，主語が“they”に変わり，“they want people of color to be talked about”と，架空の“they”を“people of color”“my people”としての“we”と対立させる構造が浮かび上がる。その上で，“they”からは凶悪犯（“thugs”），ホームレス（“bums”），移民（“immigrants”）などと揶揄されている“we”としての我々が，実はこの国をつくったのだと主張をするとともに，“we ain't goin' nowhere”, “we are not goin' nowhere”, “the ship has sailed”と同じ意味内容を，平行体を交えながら 3 回くり返す[4]。さらに 35 行目で“we”ではない他者としての“you”について,「心の中に有色人種に対する嫌悪感があるのなら（“if you’ve got hate in your heart for the people of color”）」「乗り越えろ（“get over”）」と主張されるが，ここでの“hate”という単語が，冒頭 15 行目のこの場の人々に対する“love”と対照的な構造を成している。

動画の後半部分では, 40 行目の“because”の節に始まり, “this city is a minority-majority city and this is a city where blacks and whites and browns”といった，くり返しを通して，“this city”が多様性の街であること，そして“we”としての人々が，肌の色や出自ではなく，心の在り方として人を評価する（“we judged each other by the content of our hearts”）と語られる。51 行目からは“so I am angry”，“I am angry”（53 行目），“I'm angry because”（55 行目）と，“I”を主語にした情動としての「怒り」，そしてそれに理解を示さない他者としての“people”についての怒りの根拠が明らかにされる。

署長による 81 から 88 行目の内容はこの動画におけるクライマックスであるが，“we will march as a department with everybody in this community”と，人称詞の“we”を「ヒューストン警察署」に転換した上で，“I will not，I will not allow anyone to tear down this city”と，今度は「一警察官」として，自分たちの街を破壊させないという強いメッセージを伝えている。88 行目にその根拠として“because this is our city”ともう一度“this city”をくり返して結ぶことによって，全体として“because”節が 3 回繰り返され（40，55，88 行目），この一連のディスコースに形式性と結束性を与えている。

動画 2 において, 警察署長のアセヴェド氏は, 自分自身を含む有色人種や移民を嫌悪し理解しない“they”“them”としての架空の他者に言及するが, その根拠として，この場の群衆を交えた“we”としての人々が，この街とこの国をつくったのだという主張がされている。そこには移民国家アメリカというグランド・ナラティブ(grand narrative)としてのプロップ(prop)が，非明示的に指標されていると言えるだろう。また自身の移民としての立場からは, 群衆とスタンスを揃えながら，さらに“we”を主語としたくり返しを通して，有色人種を迫害する他者，暴

動を起こす他者としての“they”を対称軸におき，最終的に警察署長としての立場から，暴挙・暴動を許さないという主張を展開する。そして，この主張全体を情動的に支え増幅しているのが，群衆によるあいづち，合いの手，くり返しといった，声の共鳴を通した公共空間の構築だと考えられるだろう。

6. おわりに

本稿で分析した動画におけるやりとりは，事前にテクストとして書かれたり，準備されたスピーチではなく，偶発的に生まれたものである。しかしながら，デモという場の持つ歴史，社会的な文脈，またアメリカの差別への歴史に刻み込まれたさまざまなボイス(voice)としての身構えに支えられ，「今・ここ」での相互行為の場面から，“angry”という「怒り」の情動がくり返し・平行体・対比といった形式性と結束性を持って，一貫性のあるディスコースとして立ち上がっている。そこに我々は価値としての意味が構築されるさまを見ることができるだろう。さらには，こうした相互行為の場から協奏的かつ創発的に立ち上がってくる声の共鳴というものは，その共鳴そのものが情動(affect)であり，それが公共の意味空間を非指示的に，しかしながら，非常に力強く構築してメッセージを形作っていくのであろう。

最後に本稿のタイトルを「公共性×詩の力」としたことから Hertzfeld を引用した一言を引用して締めくくる。「ことばの詩学とは，説得(persuasion)の一側面であり，単なる美学として片付けてはならない社会行為である」(Fleming and Lempert 2014:487)。日常的なことばの詩学とその情動は，語用論的な動力であるということ，そしてその社会的な価値というものをつくる現場であるということを，今後も考え続けていきたい。

○質疑応答

デモというかたちではなくても，黒人が暴行されて，ビデオ等に撮られて話題になったのって 1994 年のロドニー・キング事件があったと思うんですけど，あれが第二の公民権運動だというようなかたちでは言われないっていうのは，暴動につながったというような，そういう背景があったからなんですかね?

○井出　これは，たぶん規模だと思います。第二の公民権運動と言われているのは，必ずしも全ての学者が言ってるわけではないんですけれども。LA の“riot”の時っていうのは，どちらかと言うと略奪のほうがメディアに取り上げられました。むしろここでは，略奪もいろいろなところで報道されましたけれども，街角で撮られた警察と市民が話し合っている場面であったりとか，連行されていくデモ隊のなかに入って誰かがその様子を横でカメラに収めるものとか，今日取

り上げた二つ以外にも非常にたくさんの動画が拡散されました。そして本当に短い時間で，瞬く間に全米に広がったっていうことがあります。公民権運動も，白人も黒人も，非常に長い時間を掛けてつくられてきたものですが，例えばそれこそ Raciolinguistics でやられているようなことであるとか，武黒先生の「ディスコ―ダンス」のような概念が教室のなかで考えられて，それで本当にレイシズム(racism)は何なのかということを，ずっと BLM 運動の間にもさまざまなところでやっぱり語られてきているっていう，それがあるんですよね。で，そこに発火剤がついて，あっという間に広まったっていう意味には，背景として，それについて語り続けられてきたということがあるかと思います。ただ，最初のご質問に答えると，単にもう規模の大きさ，参加した数の大きさで「第二の公民権運動」と呼ばれているのではないかと，今のところ思っています。

文字化方式一覧

（Jefferson 2004，串田・平本・林 2017 参照）

[	発話の重なりが始まった位置
]	発話の重なりが終わった位置
=	ラッチング、前後の発話が途切れなく続いている
(数字)	沈黙の秒数
(.)	0.1 秒以下の沈黙
文字::	「:」の数によって直前の音が延びている長さが表されている
-	直前の語あるいは発話が途切れている
.	語尾の下がっているイントネーション
,	発話がそれから続くようなイントネーション
?	発話が上昇イントネーションで終わる
文字	音量が大きい発話
∘文字∘	音量が小さい発話
↑	直後の音が高くなっている
↓	直後の音が低くなっている
<u>文字</u>	強調して発されている
><	他の発話より速く発されている
<>	他の発話よりゆっくりと発されている
h	呼気音あるいは笑い. h の数によって長さが表される
.h	吸気音あるいは笑い. h の数によって長さが表される
（文字）	不明確な発話
(x)	全く聞き取れない発話.x の数によって音節が表される

((文字)) データについての補足説明

参考文献

DuBois, J. (2014) The stance triangle. In R. Englebretson (ed.), *Stancetaking in Discourse: Subjectivity, evaluation, interaction*, 139-182, Amsterdam: John Benjamins.

Fleming, L. and M. Lempert (2014) Poetics and performativity. In N. J. Enfield, P. Kockelman, and J. Sidnell, eds. *The Cambridge Handbook of Linguistic Anthropology*. Cambridge: Cambridge University Press.

井出里咲子（2020）「語りにおける声の共鳴－＜場所的領域＞にみるあいづち、薄い笑いと引き込み現象－」井出祥子・藤井洋子編『場とことばの諸相』 pp.105-130，ひつじ書房

Jefferson, G. (2004) Glossary of transcript symbols with an introduction. In G.H. Lerner (Ed.), *Conversation analysis: Studies from the first generation* (pp. 13–31). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

片岡邦好(2017)「創発的スキーマと相互行為的協奏について―「問い」と「相づち」による構造化を中心に」鈴木亮子・秦かおり・横森大輔編『話しことばへのアプローチー創発的・学際的談話研究への新たなる挑戦』 pp.181-211，ひつじ書房

片岡邦好(2002)「指示的・非指示的意味と文化的実践－言語使用における『指標性』について」『社会言語科学』4（2）: 21-41. 社会言語科学

加藤恒彦（2020）「第二の公民権運動としての「ブラック・ライブズ・マター」運動―黒人の二極分解を乗り越え、真の平等を求めて」山本伸ほか編著(2020)『ブラック・ライブズ・スタディーズ』pp.57-82,三月社

串田秀也・平本毅・林誠（2017）『会話分析入門』勁草書房.

坂下史子（2018）「人種暴力の記憶化と写真―「沈黙の行進」から「黒人の命も大切」運動へ」ウェルズ恵子編『ヴァナキュラー文化と現代社会』pp.139-158，思文閣出版

トゥフェックチー・ゼイナップ著・毛利嘉孝（監修）・中林敦子（訳）(2018)『ツイッターと催涙ガスーネット時代の政治運動における強さと脆さ』日販アイ・ピーエス株式会社

---

[1] コロナ禍のアメリカでは，保険や医療アクセスへの格差から黒人の死亡率が白人の 2 倍とされ，こうした社会的な不満もデモを拡大したと言われる。

[2] この“kumbaya”は“come by here”を意味する黒人英語である。黒人霊歌ゴスペルの『Kumbaya My Lord(主よ，来てください)』というフォークソングが 1960 年代，1970 年代に大ヒットしている。

[3] アセヴェド氏は 4 歳でキューバから移民し，ヒューストンで最初にヒスパニック系の警察署長となった人物で，この動画以前からもメディアへの露出が多い。

[4] ここでの“the ship has sailed”は奴隷や移民を乗せてきた船はもう去ったという意味。